

いじめという名の犯罪

広島県広島市立中広中学校 1年 内田 天



僕はいじめという言葉が嫌いだ。なぜかという、れっきとした犯罪行為であるにも関わらず、ゆるい表現に言い換えることによって、する側の人間が罪の意識を軽くしているのではないかと感じるからだ。代表的なものでは「万引き」である。「窃盗罪」であるのに「万引き」だとすごく軽い感じがする。そのため、する前やした後の罪悪感が軽減され、簡単に罪を犯してしまったり再犯につながったりするのである。

一言に「いじめ」といっても、悪口であれば「侮辱罪」や「名誉毀損」にあたるし、叩いたり蹴ったりすれば「暴行罪」である。やっている側はふざけてやっても、犯罪であると認識して事の重大さを理解してほしい。

僕も陰口を言われた事があるが、内容にまったく身に覚えがない上に仲が良いと思っていた友達にまで言われて腹が立ったし、なにより悲しかった。そのことをお母さんに話した時、

「大切なわが子の心や体を傷つけられたら、親は相手が誰であろうと死ぬほど憎いものよ。もし誰かをいじめるような事があったら、その人を大切に思っている人に殺される覚悟でやりなさい。」

と言われて僕は驚いた。陰口を言われた僕よりもお母さんの方が激しく怒っていたからだ。いじめは、された本人だけではなくその家族まで傷つけてしまうのだと思った。

僕達は小さいころから「自分がされて嫌なことは人にはしない」と教わってきたが、人によって嫌と感じることは違う。「自分がされて嫌なことは人にはしない」というのは当たり前だが、「相手が嫌だと感じることはしない」というのが大事だと僕は思う。友達同士でふざけ合っている時など、こちらは冗談のつもりが、相手にとっては本当に苦痛な時もある。自分が今からする言動一つ一つを相手が嫌な思いをしないか考えて相手と接しなければならない。

悪口に関して一つ面白い話がある。『お釈迦様と悪口男』という話である。あるところにお釈迦様が多くの人に尊敬される姿を見て、ひがんでいる男がいた。男はお釈迦様をギャフンと言わせるために作戦を練り、待ち伏せをして皆の前で口汚くののしった。しかし、お釈迦様はどんなにひどい言葉で侮辱しても一言も言い返さなかった。虚しくなった男はどうとうその場にへたりこんだ。その様子を見たお釈迦様は静かに男にたずねた。

「もし他人に贈り物をしようとして、その相手が受け取らなかった時、その贈り物は一体誰の物だろうか。」

こう聞かれた男は、突っぱねるように言った。

「そりゃあ言うまでもない。相手が受け取らなかったら、贈ろうとした者のものだろう。分かりきったことを聞くな。」

男はそう答えてからすぐに

「あっ。」

と気づいた。お釈迦様は静かにこう続けた。

「そうだよ。今、あなたは私に対してひどい言葉を投げかけた。でも私は、その言葉を少しも受け取らなかった。だからあなたが言ったことは全て、あなたが受け取ることになるんだよ。」

つまり悪口は受け取らないと相手の元に戻るという例え話である。悪口は「言わない」ことはもちろん「受け取らない」ことも大切なのである。

自分を非難されるようなことを言われたら、ほとんどの人がダメージを受ける。傷ついて落ち込んでしまったり、腹が立ってイライラしたりすることもある。言葉は人の心を傷つけるナイフにもなる。しかし、心がナイフより固くて強ければ、痛くもかゆくもないのだ。自分の心を強くすることが効果的なのである。

だが、いじめはしてはいけないのが大前提だ。この世にいじめられていい人なんてただの一人も存在しない。たとえいじめていなくても見て見ぬ振りをするのも同罪である。僕は、いじめをしないのはもちろんだが、いじめの場面に遭遇した時に声を上げられる人でありたい。

いじめは、最悪の場合人の命を奪ってしまう行為である。そんなことにならないためにも、いじめをしてしまいそうになったら、大切な人の悲しそうな顔を思い出して思いとどまってほしい。いじめという名の犯罪を犯さないために。